

2017年コスモス国際賞受賞記念講演会（東京）

議事録

実施日：平成29年11月9日（金）

場所：首都大学東京 荒川キャンパス講堂

時間：午後4時～午後6時

【プロローグ動画】

ジェーン・グドール博士のナレーション

私の人生、それは素晴らしい旅路でした。この星に住む大小様々の生き物たちは常に私を魅了してきました。地球・・・常にそこにあり、食べる物、身を守る場所、心や体を元気にする糧、想像力の原点・・・それらを全て与えてくれるもの、その地球を無視することなど誰もできません。そこにある動物、植物、空気、水、全てが私たちの恵みとなっているのです。



人間、動物、環境、これらは全て相互に関わり合っています。自然界が苦しむような状況では私たちも苦しみを得、自然界が栄える状況では私たちも栄えることができるのです。

人間が自然と調和して生きることのできる世界の実現は可能だと私は信じています。しかしそのためには一人ひとりが、自らの役割を果たさなければなりません。

そうすれば、自身の人生を振り返った際、心からやり遂げたと言うことができるでしょう。

[ビデオ終了]



皆様こんにちは。若い方が大勢いらしているのはとても嬉しいことです。日本語でお話しできればよいのですが、残念ながらできません。代わりに私がよく知っている別の言葉でご挨拶したいと思います。それは野生チンパンジーの言葉です。これからお聞かせする言葉は、タンザニアのゴンベで朝、山に登り、運が良ければ聞くことができる挨拶です。[チンパンジーの鳴きまね]。私ですよ、ジェーンですよ、という意味です。

さて、話を始めましょう。ご承知のように人生という旅路は、一人きりでは進めません。手を差し伸べ、支援し、間違ったら手助けをし、正しかったら褒めてくれる、誰にもそんな人が必要です。そして私自身、自分の長い人生を振り返った際、感謝したい相手は山のようにいます。この地球で83年も生きてきたのです。皆さんにとっては非常に長い年月でしょう。皆さんのお母様よりも先に生まれていたのですから。この長い人生の間、私は友人、同僚、ジェーン・グドール研究所設立を支援してくれた仲間たちに恵まれてきました。けれどもその中で最も感謝したいのは母親です。私は生まれつきどんなものでも動物が大好きです。「ジェーン、どうしてこんなに動物好きになったの？」と尋ねられることがよくありますが、特に理由はありません。生来動物好きなのです。でもそんな私の動物好きを支えてくれる母親がいたということは非常に幸福なことでした。

これからお話しすることは、既にお読みになったことのある方もいらっしゃるかもしれませんが、是非ともお話ししたいと思います。私が暮らしていたロンドンには東京のような都市で、野生動物はほとんどいませんでした。鳩や犬、猫などの小動物くらいです。4歳半の時、休暇で母親が郊外の農場に連れて行ってくれたことがありました。当時は動物を生き地獄のような狭い場所に詰め込む、残酷な工場のような農場はありませんでした。動物たちが農場で草を食み、雌鶏が短い鳴き声を上げながら農場を歩き回っているその光景は、私には魔法のように思えました。一つの仕事が与えられました。鶏の卵を取ってくる仕事です。鶏は木製の小さな鶏舎で卵を産みます。だいたいこの位の高さです。そして夜眠っている間も、狐から卵を守っているのです。巣箱は端の方にありました。

毎朝私は鶏舎に行き、箱を開け、卵があれば、持ってきた小さな籠に入れます。よく覚えていないのですが、どうやらいろんな人に尋ねていたようです。鶏の卵はこんなに大きいから鶏にも卵が出てくるだけの大きさの孔があるはずなのに、そのような孔があるようには見えない、どこにあるの、と。しかし誰も教えてくれませんでした。茶色い鶏だったということはとても鮮やかに覚えており、今目を閉じてもその姿を思い浮かべることができるほどです。そんな鶏が鶏舎の一つに上っていく姿を見て、卵を産むのだなと分かったのでしょう。自分で孔を見つけたいものですから、鶏の後を這って追いました。もちろんこれは大きな過ちでした。鶏としては、卵を産もうとしている時に4歳の女の子に後を這ってきて欲しくはないのです。怖いと思ったのでしょう、鶏は飛んで出て行ってしまいました。4歳半の少女だった私は、この鶏小屋は危険な場所なんだ、だから鶏は脅えて飛び出してしまったんだ、それなら鶏は戻ってここで卵を産むことはないだろうと考え、外へ出て、空っぽの鶏小屋に入って待とうと思いました。

もう少しで発見できそうなのだから諦めずに待とうと思ったのです。長い時間待っていましたが、それは楽しい時間でした。しかし気の毒なのは家族です。娘がどこに行ってしまったか見当もつかず、4時間半後、母は警察に届け、皆で捜索してくれていたようです。母は本当に怖かっただろうと思います。でも私が藁だらけで家に走って帰ってきたとき、怒るのではなく、何も言わずにどうして出かけたの、こんなことは二度としてはいけませんよ、と言いかせただけでした。興奮した気持ちは抑えられてしまいました。私が目を輝かせながら鶏がどうやって卵を産むのかを話し出すと、母は座って耳を傾けてくれました。今でも目を閉じると、鶏が卵を産み落とす様子が目に浮かびます。

この話を皆さんにしたかった理由は二つあります。第一に、この話の主人公は小さな科学者だということです。分からなくて尋ねるが正答が得られない、自分で見つけようとする、過ちを犯す、諦めない、忍耐を学ぶ。この全てがこの少女には当てはまるということです。また、私の母のような母親でなかったなら、その科学的好奇心の芽をつぶしてしまったかもしれない、そして私がこれまでしてきたことを成し遂げることはできなかったかもしれないということ、それが第二の理由です。母親が良き支援者であったということは重要なことです。母は常に私を支えてくれました。動物の本を買ってきてくれたのも母です。ジェーンに動物の本を与えれば、早く読むことができるようになるよとよく分かっていたでしょう。確かに母は正しかったと思います。



10歳の時、小さな本を見つけ、小遣いを貯めてその本を買いました。小遣いはほんの少ししかもらっていなかったのです。そして不思議なことが起きるのです。私がこの地球上で何年生きてきたかはお話しましたね。10歳の時というのは、第二次世界大戦中で英国と日本は戦争状態にあり、英国はドイツと戦っていました。ですから成長するにつれ、日本人やドイツ人のことをあまり良くは思わないようになりました。しかし今では多くの日本人の友人がいます。ドイツ人の友人もたくさんいます。皆、いろんなことを切り抜けてきたのです。とにかく10歳の頃、この小さな本を見つけました。「ターザン」です。ターザンのことは皆さんご存知でしょう。映画を見た方も多いと思います。ターザンをご存知ですよ？そのターザンに私は恋してしまったのです。10歳の頃、テレビは無く、あるのは本とラジオだけでした。それで私はこの輝かしいジャングル王に心から恋してしまったのです。それなのにひどい人、ターザンはジェーンと結婚してしまいます。別のジェーンです。私ではなくもう一人のジェーンと結婚してしまうのです。

いずれにせよ、私の夢はここから始まりました。大きくなったらアフリカに行き野生動物と暮らし、動物たちの本を書くのだと。科学者になるとは思ってもいませんでした。70年前、女の子が科学者になるなんて考えることはなかったのです。学校の友達は皆笑いました。友達も先生もこう言いました。「ジ

ェーン、叶う夢を持った方がいいよ。アフリカなんて行けやしない。女の子がそんなことできるわけないよ。野生動物と暮らすなんて。現実的な夢を持った方がいいんじゃない？」でも母は違いました。母が言った言葉を、世界中の若い人達に伝えているのですが、今、皆さんにも伝えたいと思います。母はこう言いました。「ジェーン、何か本当にやりたいことがあるのなら、一所懸命努力しなさい。やりたいという気持ちを持ち続ければ、きっとチャンスはあるはずだから。諦めなければ道は見つかるものよ。」

母が今、生きてくれていると思います。多くの人が私の所に来てこう言うのです。「ジェーン、あなたには本当に感謝しています。自分がしてきたのだから私にもできると教えてくれたのですから」と。私に言ってくれた言葉がこんなにも世界中の若い人達に伝えられていることを母が知ったらどんなに喜ぶだろうと思います。

学校の勉強は得意でした。試験は全て合格し、常にクラスの上位にいました。しかし大学進学のための学費が無かったため、18歳で卒業し、就職しなければならなかったのです。自分で稼ぎ、自活しなければならなかったのです。ですが母のおかげで、退屈ですが、速記やタイピング、簿記を学ぶことのできる秘書科に進学する学費ができたのです。そうしてロンドンで勉強し、良い職を得ることができました。ドキュメンタリー映画に携わる仕事で、映画の製作を学ぶことができました。秘書としての仕事はあまりしませんでした。

ロンドンに住んでいた頃、学友から一通の手紙を受け取りました。両親がアフリカのケニアに農場を購入し、移住したというのです。そして休暇に遊びに来てねと誘ってくれていました。チャンス到来です。アフリカに行く機会がやって来たのです。しかしロンドンにいては貯金することはできません。そこで

実家へ戻り、近所のホテルでウェイトレスとしての職を得ました。非常にきつい仕事でした。しかし何か目的があって何が何でも貯金するのだと決めた人間は、ウェイターでもウェイトレスでもできるものです。悪くは無いのですが、本当に重労働でした。きつい仕事というものを経験することができました。とにかくこれで十分な額を貯金することができるとです。そしてついにアフリカとの往復運賃に必要な金額に達しました。当時ケニアは、大英帝国の旧植民地であり、復路の旅費を持っていなければ入国することができなかつたため、往復の旅費が必要だったので。

そのため往復運賃に達するまで仕事を続けました。さてこの地球に長く生きてきた私ですが、今日、ケニアへ行くとすれば、飛行機で行くでしょう。しかし当時、旅行者を乗せて往復する飛行機は無かつたため、飛行機では行けませんでした。船で行ったのです。とてもワクワクする経験でした。地理に詳しい人ならご承知でしょうが、船でロンドンからケニアのモンバサへ行く早道は、スエズ運河を通る航路です。しかし英国は、エジプトとの間でばかげた小競り合いをしており、スエズ運河は閉鎖されていました。つまり、船はロンドンからアフリカ南端のケープタウンをぐるりと回ってモンバサに行かなければならないのです。3週間半の船旅です。なんて素晴らしいことでしょう！どんな旅だったか想像できますか？

23歳の時でした。今で言う19歳位でしょうか。とてもナイーブな年頃です。戦後間もない頃でした。船上で家族、友人、祖国に手を振り、素晴らしい冒険の旅へ出発したのです。出港したのは冬で、海は冷たく灰色でしたが、南下するにつれ、海に青みが増し、空気は暖かくなってきました。岸に近づいた時に潮に乗って漂ってくる香はどんどんと異国情緒あふれるものになっていきました。そしてついに、海水温がすっかり上がった頃、トビウオを目にした

ことを忘れることはできません。まるでトビウオショーのようでした。皆さんがトビウオをご存知かどうか分かりませんが、ヒレを使って水面から跳ね上がり、まるで飛んでいるように見えるのです。アフリカ大陸の南端に近づくと、今度は船の周りをイルカが跳ね回りました。

アフリカ大陸に足を下ろした最初の場所はケープタウンでした。非常に美しい街です。壮大なテーブルマウンテン、それを取り囲む海。ケープタウンに上陸して2日を過ごしている間に数人の人と知り合いになりました。公園に連れて行ってくれたり、ホテルに食事に連れて行ったりしてくれました。歩き回っている時、公園の全ての椅子やホテルのドアにはアフリカーンス語で何か書いてあることに気付きました。レストランのドアにも、トイレのドアにも同じアフリカーンス語が書かれています。どういう意味の言葉なのでしょう？それは「白人のみ」という意味の言葉でした。家ではそんな風には育てられて来なかつたので大きなショックを受けました。恐ろしくさえ感じました。せつかくのアフリカ到着が台無しになってしまったように感じたのです。

とまれ、船は出港しようやくケニアに到着しました。列車でモンバサからナイロビへ行くと、友人が両親と一緒に迎えに来てくれていました。車で農場へ向かいました。とても美しい森のあるホワイト・ハイランドと呼ばれる所でした。道路のすぐ傍に動物がいます。正真正銘アフリカの動物たちが野生で自由に動き回っているのです。最初の朝、友人が私の部屋へ走って来て言いました。「ジェーン、窓の外を見てごらん。大きな雄ヒョウの足跡があるのよ。」そうです。ついに私は来たのです。夢が叶ったのです。

友人の家に滞在していた時、誰かからこんなことを言われました。「ジェーン、動物に興味があるなら、

ルイス・リーキー博士に会いに行くべきだよ。」博士は有名な古生物学者で、有史以前の生物の化石調査をしており、人類の最初の祖先、すなわち石器時代の男女の化石を求めてこれまでに東アフリカの様々な場所を回っていました。当時博士は自然史博物館の学芸員だったのです。私は約束を取り付けて博士に会いに行きました。博士は私を色々な場所へ連れて行き、そこにいる動物たちについて多くの質問をしてきました。それらは私が見たかった動物ではありませんでした。博物館が所蔵する剥製や遺骸だったのです。博士は色々な質問をしてきたのですが、私は母の忠告に従って、アフリカの野生動物について書かれた書籍を見つけれられる限り読んでいたため、博士の質問に多く答えることができたのです。



さてここからのお話しはとても興味深いもので、皆さんのうち何人かの人にとっては覚えておくのと役に立つこともあるかもしれません。先にお話ししたとおり、学校卒業後、退屈な秘書科へ進むことになりました。本当に嫌だったのですが就職する必要がありました。ルイス・リーキー博士との話が終わった時、博士の口からどんな言葉が出てきたか、当ててみてください。博士はこう言ったのです。「実は先週、秘書が突然退職してしまっただけでね。秘書を探しているところなのだよ」と。何と云うことでしょうか。博士の秘書になるという申し出に答えるために必要なスキルを、過去の退屈な仕事が私に与えてくれたのです。結局秘書の仕事はあまりすることな

く、アフリカの動物について多くのことを学びました。スタッフに聞けばどんな質問でも答えてくれるため、哺乳類、鳥類、昆虫、カエル、ヘビ、植物等々について多くを学ぶことができました。その後博士は、奥様ともう一人の若い英国人女性と一緒に私をサファリへ同行させてくれました。博士がよく行っていたこの場所は今では非常に有名になっています。毎夏3ヶ月間、博士は化石調査に来ていました。オールドヴァイ峡谷と呼ばれており、化石の発見によって今ではすっかり有名になっています。しかし私が連れて行ってもらった頃、すなわち1957年当時、ヒトの化石は発見されておらず、オールドヴァイなど誰も知りませんでした。セレンゲティ平原の真ん中に位置しており、当時平原には動物がたくさんいました。今ではほとんどいなくなりました。保護区にしかないでしょう。しかし当時はどこもかしこも動物だらけでした。

日差しが照り付ける中での化石の発掘作業は重労働でした。しかし夜になると、もう一人の女性、ジュリアンと私は峡谷周辺の平原に出ることを許されました。そこには動物しかいませんでした。シマウマ、レイヨウ、他にも色々です。ある晩、サイがいました。この講堂の向こうの壁程の距離だったのですが、幸いサイは目が悪いのです。何か変わったモノがいると思ったのでしょうか、「プツ」と言うおかしな鳴き声を小さく上げながら、尾を上げて行ったり来たりしていました。幸い風はサイの方から私たちの方向へ吹いていました。少しして、サイは走って行ってしまいました。

またある晩、若い雄ライオンに遭遇しました。十分成長しており、タテガミは肩まで伸びていました。おそらくこれまでに私やジュリアンのような生き物を見たことがなかったのでしょうか。それにこの時も、サイの時よりも少しだけ距離がありました。それでジュリアンと私は静かに離れようとしたのですが、そのライオンはついてくるのです。ジュリ

アンは言いました。「峡谷の底の茂った藪の中に行った方が良いのではないかしら？そうすれば隠れることができるから。」私は言いました。「ジュリアン、隠れてもライオンには分かってしまうわよ。それに私たちからライオンが見えなくなってしまう。平原に上った方がいいわね。」そして実際そうしました。その夜、キャンプファイヤーを囲んでルイス・リーキー博士が私にこう言いました。「ジェーン、君のしたことは正しかった」と。そしてその時、博士は私に最も人間に近い動物、チンパンジーと暮らし、チンパンジーのことを研究するチャンスを与えようと決めたということです。

資金調達には1年を要しました。私は大学にも行っておらず、学位も持たない、英国から出てきただけの女性でした。それでも博士が見つめてきてくれた富裕な米国人ビジネスマンはこう言ってくれました。「分かった、ルイス。6ヶ月分の資金を提供するから、彼女のすることを見てみよう」と。ところが別の問題がありました。先に申し上げた通り、今でいうタンザニア、かつてのタンガニーカは当時、ケニヤ同様、崩壊しつつある大英帝国領でした。タンガニーカを管理する英国当局は、若い女性が単身で滞在するのは責任が取れないと言ってきました。ばかげているでしょう？こんな話聞いたことがありますか？でもリーキー博士は諦めませんでした。そしてしばらくして、当局から許可が下りました。しかし単身は許可しない、同行者が必要だということでした。同行してくれるような人が果たしているのでしょうか？6ヶ月の内の最初の4ヶ月間、驚くなけれ母親が同行してくれたのです。

こうして1960年、私達二人はゴンベ国立公園に到着し、調査を開始しました。この調査がご承知の通り、現在もなお継続しているのです。調査の着手、これは容易なことではありませんでした。というのも、チンパンジーは私達のような奇妙な白い類人猿を見かけると、すぐに下生えの中に姿を消してしま

うのです。こうして何週間、何ヶ月と経っていき、資金は底を尽きそうになり、どんどん心配になってきました。ほんの6ヶ月では、心を躍らせるような出来事に何も遭遇しない間に資金が尽き、研究は終了してしまう、そしてルイス・リーキー博士を失望させてしまうだろうと。

しかし母がいました。落胆している私に向かってある晩こう言いました。「ジェーン、あなたは自分が思っている以上に多くのことを学んでいるのよ」と。私はある山頂の場所を見つけていました。そこから双眼鏡を覗くとチンパンジーを見ることが出来ます。そうしてチンパンジー達が小さな群れに分かれてどのように行動しているかということ突き止めていました。雄が単独行動する場合もあり、雄が4~5頭の群れで行動する場合があります。また母親チンパンジーが2頭または3頭の時もありましたが、家族連れで行動することもありました。おいしそうな果実が熟すと、こういった小さな群れがたくさん集まることもありました。そしてこの美味しい食べ物で宴会しているような様子は非常にエキサイティングでした。実際、今ではチンパンジーは群れで生活しているということが分かっており、群れ毎に縄張りがあり、雄が縄張りの境界を見回っています。何をしているのでしょうか？雌や子供達のため、縄張り内の食料源を守っているのです。もちろん最初はそんなことは知りませんでした。

しかしともかくも、母が指摘してくれたように、チンパンジーが夜、木に登り、枝の上で丸くなり、快適な寝床を作って眠るということ、色々な鳴き声を発すること、あるいはチンパンジーが食べる食料について、たいていは果物ですが、葉、花、樹皮を食べることもある、といったことも私は分かるようになってきていたのです。母が出国して2週間後のことでした。とても寂しく感じていたその日、森の中を歩いていて、美しい白い髭のある1頭のチンパンジーを見かけました。私を怖がらなくなった最初の

チンパンジーです。双眼鏡を使って見ていたのですが、そのチンパンジーは逃げて行ってしまふことはありませんでした。さらに見ていると、草の茎を手折り、シロアリ塚に差し込み、注意深く引き上げました。そして顎でしっかり掴まっているシロアリ達をつまみ取って食べました。道具を使ったのです。その後、私はさらに興奮する光景を目にしました。そのチンパンジーは、葉の茂った小枝を折り、道具として使うことができるよう、丹念に葉を取り除き始めたのです。道具の製作です。お聞きになったことがあるかもしれませんが、当時、人間のみが道具を使ったり作ったりするのだと言われていました。実際、ヒトとはすなわち「道具を作る者」と定義されていたのです。

この光景を見たことが私のターニングポイントとなりました。このことで、ルイス・リーキー博士は国立地理学会へ資金調達に出向いてくれることとなりました。承認され、最初の6ヶ月分の資金が底を尽いた後も、さらに調査を継続する資金を提供してくれることになったのです。それだけでなく、映画製作者や写真家を送り込み、私が目にしたことを記録することとなりました。それがヒューゴ・ファン・ラーヴィックでした。その頃には、私が名付けたシロアリ釣りの名手であるディビッド・グレイブアードはすっかり私に慣れてきており、森の中で、私を仲間に紹介したいのかと思わせるほどでした。想像してみてください。ある群れに近づこうとすると、普通はすぐに皆、いつでも逃げられるように身構えます。でもディビッドがいて静かに座っていると、他のチンパンジーもディビッドと私を交互に見ているのです。おそらく、この生き物はそんなに恐れる必要は無さそうだと考えているのでしょう。なぜならディビッドはリーダーで、皆から尊敬されていたからです。徐々に私はディビッドの仲良し、ゴライアスのことも知るようになってきました。ゴライアスは、後に分かったことですが、トップの座を占める雄チンパンジーでした。またその他の数頭の

雄、さらには1頭の年取った雌、フロとその家族のことも知るようになりました。また別の雌、パッションやオリ、メリッサのことも知るようになりました。

チンパンジーらが私に慣れてくるにつれ、私の方としても固体認識が可能となってきました。認識できるようになると、名前を付けました。毎日野外で、観察した彼らの様子を逐一記録しました。当時野外調査をする人はいなかったため、何をすべきかを教えてくれる人は誰もいませんでした。そこで私は、自然観察に出かけた子供時代にしていたことをするようにしました。小型の手帳に全てを記録し、每晚必ずノートに清書しました。当初資金不足でタイプライターを持っていなかったため、ペンで書きました。初期の日誌は全て手書きだったため、非常に長い時間がかかる日もありました。

さてこうして、先に述べた通り、ヒューゴが到着しました。彼は写真家兼映画製作者でした。彼の撮影した写真や映像を使って、地理学会は初期の雑誌記事を書き、最初のドキュメンタリー映画を製作しました。こうして活字となり、映画となったジューンとチンパンジー達の物語は、まずは米国の家庭に、そして徐々に世界各国に届けられるようになりました。こうして漸く私は肩の力を抜き、腰を据えてもっと多くのことをこの素晴らしいチンパンジー達から学ぶことができるようになりました。チンパンジーが人間と非常に似通っている点がたくさんあるということ、例えば、意思疎通を図るのに人間は言語を使用しますが、チンパンジーも同じであるということが分かってきました。また人間は色々な態度や手ぶりを用いますよね？チンパンジーも全く同じなのです。仲良しの2頭が出会うと、抱擁し、キスをすることもあります。優勢を競い合っている仲の良い雄同士の場合、肩を怒らせたり拳を振り上げたりします。怒ると石を投げつけてくることもあります。道具と同じように武器としてモノを使うこ

とができるのです。別のチンパンジーから食料をもらおうとする場合、人間がするように、掌を上へ向けて手を伸ばしてちょうだいをします。こうして私の研究はどんどん進み、チンパンジーの非言語的コミュニケーション、すなわち言葉を使用しない意思疎通、それがどれほど人間と似通っているかということが分かってきました。チンパンジー同士の交流を見ると、チンパンジーに関する知識をあまり有していなくても、何をしているかすぐに分かります。私達も同じようなことをするからです。徐々に私は近くにいる時間を延ばし、チンパンジーの各個体の性格に大きな差異があるということが分かるようになってきました。

雄同士が覇権争いをして 1 頭がボスの座に君臨するのですが、他の雄達も虎視眈々とその座を狙っているということが分かってきました。人間と同じです。会社で社長や CEO の座を狙っている男達と同じです。いずれも負けず嫌いで、攻撃的な態度や専制的な態度を取る雄もいます。人間界の政治家の姿を思わせませう。もっと賢く振る舞ってその座を奪おうとする者もいます。別の雄と友好関係を結び、その仲間がそこにいて味方してくれる場合にのみ上位の雄に挑むのです。本当に様々です。また雌にも、良い母親とあまり良くない母親がいることも分かってきました。本当に酷い母親と言うのは目にすることはありませんでしたが、それは恐らく酷い母親の遺伝子は進化の過程で姿を消してしまうためでしょう。良い母親は、愛情豊かで、子供たちを保護しますが、過保護ではありません。子供に自分で探検する自由を与えているのです。

最も重要なことは、チンパンジーの母親もまた私の母同様、子供の支援者であるということです。子供が困難なことに巻き込まれてしまった場合、たとえ自分自身を危険に曝すことになろうとも、母親は飛んで来て守ろうとします。そして後になって思い起こすと、このように支えてくれる母親がいるチンパ

ンジーの子供は、成長後に成功者となることが多いのです。自分に自信を持てるのです。雌は良い母親に、雄は雄の階層の中でより上位に立つ傾向がある、すなわちより多くの子孫を残すことが可能となるのです。

チンパンジー社会の配偶行動には厳しい競争があります。雌雄一対のペアリングはありません。そのため雌は発情期になると、群れの中の多くの雄、時には全ての雄と交尾することもあります。ごく最近になって、生まれただばかりのチンパンジーの子供それぞれの父親は誰かを突き止めることができました。糞便のサンプルを用いて研究室で DNA を抽出し、解析する技術が確立されたためです。そうして今ではゴンベの群れの全てのチンパンジーの関係性が分かっています。初めて父親の同定を実現したのです。これまでも推測はしてきており、多くはその通りでしたが、今でははっきりと分かっています。

こうして私は野外調査を 2 年間実施し、お話ししたように、全てではありませんが、多くのことが分かってきました。そんな折、ルイス・リーキー博士から手紙を受け取りました。手紙には、博士が私のために常に資金調達に奔走する訳にはいかないのだから、自分で資金調達しなければならない、とありました。しかし学位を取得していないとそれは難しいだろう。だから、と博士はこう言いました。「ジェーン、大学卒業学位 (BA) を取っている時間はない。英国のケンブリッジ大学に君の籍を得たから、博士号を取得しなさい」と。とても心配になりました。大学に行ったこともないのですから。博士課程には学識の高い教授達があります。皆 BA、そして博士号を取得するために猛勉強してきた人達ばかりです。そしてそういった人達が私の教授、指導教官となったのです。ケンブリッジ大学に入学した私に対して、このような教授達の多くから、君の手法は間違っている、と言われた時の私の気持ちを皆さん、想像できますか？教授たちはこう言いました。「ジ

ェーン、科学研究では、動物に名前を付けてはいけないということを知らなかったのかい？ナンバリングする、それが科学的手法なのだ。それに動物が性格を有すると考えてはいけない。幸福、悲しみ、恐れ、絶望といった感情を有するとか、問題解決する心を持っているとか、思考能力があるとか、そんなことも言うてはいけない。性格、感情、心は私達人間だけに特殊なものなのだから」と。

しかし幸い私には子供の頃に、教授達の言っていることは、この点においては間違っているということを知ってくれた先生がいました。先生というのは飼っていた犬のラスティです。犬や猫、馬、牛、豚、鳥と生活を共にしたことがある人であれば、動物もまた性格や心や感情を持っているということを知っているでしょう。このことを、教授達も分かっているのですが、ただ、それを証明する手法が分からない、だから否定しようとするのです。ともかく教授達は間違っており、動物達もこういった属性を有しているということを知り、また、自立してやっていく自信を母から与えられてきた私ですから、なんとか博士号を取得しました。そしてゴンベに戻り、研究所を設立しました。世界各地から学生達が来て、チンパンジーの行動を様々な角度から研究しました。興味深いことですが、科学者の訪問者第1号は、日本人の霊長類学者、伊谷教授でした。教授が来られたのは、私がゴンベに到着してほんの2ヶ月が過ぎた頃のこと、短期滞在されました。

さてこうして、毎日森へ行くことができるようになりました。熱帯雨林の中へ入っていくことは、私にとって非常に精神的な経験でした。一人きりのこともあれば、チンパンジーらと一緒にいることもあり、別の動物や木々しか見ることの無い日もありましたが、全てのものが何と互いにつながり合っていることだろう、という気持ちがいつも湧き出てきました。あらゆる小さな種（しゅ）が、どんなにちっぽけな

ものでさえ、複雑に紡がれたタペストリーのような大きな命の営みの中で、特別な役割を持っているのだ、という感情です。ゴンベの森には、素晴らしい滝が数ヶ所あり、その一つに80フィートの滝がありました。滝としては小規模で、滝が落ちる小川も非常に浅いものでしたが、岩々の上に落ちた水しぶきが、何百年もの間に岩を穿ち、溝が作られている、そんな滝でした。チンパンジーがこの滝に近づいてくることがありました。興奮で徐々に体毛が逆立ち、そわそわと足を動かして体を揺らし始めます。いつもはしないことですが、水中にばしゃんと入ることもあります。そうして大きな岩を持ち上げては投げ入れたり、木の蔓を掴んでよじ登ったり、水しぶきの中に蔓を押し出したり、あるいはただ座って、水が落ちるのを見ている、水の流れをただ見ているだけということすらありました。私としてはこれは、不思議、畏敬といったような、私自身が滝を見て感じるのと同じ感情がチンパンジーの中にも生まれているのだと考える訳にはいきませんでした。

チンパンジーと人間との類似点についてお話ししましょう。最も大きな相違点は、人間には知性があるということです。個人的には、知性が発展するきっかけとなる何か、人類の進化のある時点で起きたということだろうと考えています。そうして人間は、今私が皆さんにお話ししているように、互いに意思疎通を図る能力、すなわち言葉を発展させてきました。言葉を使うと、相手が見たことのないことでも伝えることができます。そして正しく伝えられれば相手は想像することができます。何か問題が起きれば、知識のある人達を連れて来て、皆で力を合わせて問題を解決することもできます。遠い過去のこと、恐ろしかった戦争のことも、またその戦争を如何に切り抜け、今では友人となっていることも話することができます。そういったことがまた起こるかもしれないと知ること、遠い未来のために計画を立てることもできるのです。

チンパンジーを観察しながらこう考えました。チンパンジーに言葉で意思疎通を図る能力があったなら、滝を見ていたときに感じていたその感情が、水、太陽、月など初期の人類が自分達の理解を超える対象を崇拜していた一種の初期アニミズム信仰に変容していくこともあるだろう、と。もちろん分かりませんが、こう考えていたいと思います。

この期間は人生で最高の日々でした。ではどうして帰国したのか？年間300日も世界中を回り、このように講演をしたり、企業人や政治家と面談したりしているのはなぜなのか？ずっと滞在することもできたのに。実は1986年、米国で大規模な会議が開催されました。チンパンジーの研究をしている多くの人々が一堂に会す会議で、その1セッションで、ある午後、保護をテーマに議論が行われていました。当時、現地調査の場所は7ヶ所あったのですが、それぞれの場所に関する映像やスライドはいずれも、如何に森林が破壊されているか、またチンパンジーの数が如何に減少しているかということが映し出されており、私は大きな衝撃を受けたのです。人々が食料とするために狩猟をするという、何百年も継続してきた自給狩猟とは異なり、可能な限り多くの動物を撃ち殺し、その肉を売買するという野生動物の食肉売買が問題となってきているという話もありました。持続可能どころではありません。

ハンターらはワイヤ製の罠を使ってチンパンジーを捕獲しました。食料となるレイヨウやイノシシの捕獲に使用する蔓製の罠ではチンパンジーは壊してしまうためです。チンパンジーはワイヤ製でも壊してしまうのですが、手足を縛られた縄はほどくことができません。多くのチンパンジーが壊疽や感染症で手足を失ったり、死んでいったりしています。また多くの人々、多くのアフリカ人が森の奥まで移動してきて、木々を伐採して食物を育てたり、牛を放牧したりするようになり、森林が徐々に姿を消しつつあります。1980年代初期、大手木材会社が

アフリカの大規模な森林の浸食を始めました。木材会社の他に鉱山会社もです。チンパンジーの数はアフリカ各地で減少していきました。行動を起こさなければならぬと強く思いましたが、どうすべきかわかりませんでした。



そこでまずは資金を調達して、チンパンジーが生息する21ヶ国のうち、6ヶ国ほどを訪問しました。そこでチンパンジーに何が起きているか、多くのことを知ることができました。起きていることを誰かに伝えようと思ったら、まず、自分の目で実際に見ることが本当に重要だと感じました。何かで読むだけではだめなのです。読んだことを追体験しなければなりません。インターネット情報は特にそうです。インターネット情報の多くは真実ではありません。まあ実際その当時はインターネットなど無かった時代だったのですが。



こうしてチンパンジーが直面している問題の多くを実際に目にしました。同時に、チンパンジーの生息地である森の内外で暮らすアフリカの人々が直面している大変な問題も分かってきました。ひどい

貧困、教育施設や医療施設の不足、食料不足による暴力の多発等です。また、その土地で採鉱や木材伐採を目論む外国企業の進出により、アフリカの人々は自分達の家を追い出されているということも。

1990年、小型飛行機でゴンベ国立公園へ飛びました。1960年当時、30平方マイル程の小規模なこの公園の森林は、東アフリカと西アフリカを横断する赤道直下熱帯林帯の一部でした。しかし1990年頃には熱帯林帯ではなくなってしまっていました。徐々に森林が縮小していき、局地的にしか残っていない継ぎ接ぎの状態となっていたのです。飛行機から見下ろすと、ゴンベは木の生えたちっぽけな島のようで、その周りは完全にはげ山となっていました。木々はいったいどこに行ってしまったのでしょうか、いったいどうして？この地の抱擁力を超えた数の人々が住むようになった、というのがその理由です。自分達そして家族が食べていくために、人々はより多くの食物を育てなければならず、木々を伐採したため、土地は荒廃し、肥沃さを失ってしまったのです。人々は生きるのに必死で、急な斜面の木々でさえ、ゴンベには急斜面の峡谷が連なっているのですが、そんな所の木々でさえ伐採しました。そのため土壌侵食がひどく、小川は山の斜面から流れる沈泥で塞がれてしまっていました。

そこで分かった事は、まず人々を助けないといけないということでした。より良い暮らしができるように手助けをしなければ、チンパンジーを守ることはできないのです。そこで先ほど名前が出てきた「タカリ」というプロジェクトを開始しました。まずはゴンベ国立公園に隣接する12の村落で開始しました。「タカリ」は、傲慢な西洋人が貧しい村落へ行って、何もかもなっちゃいないな、生活を良くするにはどうすれば良いか教えてあげるよ、などと言う活動ではありません。そんなことはしないのです。ただ、現地の村落のタンザニ

ア人のチームを結成して村落へ行ってもらい、人々の話に耳を傾け、暮らしを良くするために私達がお手伝いするとすればどういったことだと思いますか、と尋ねるのです。そう、全体的な方法で始めるのです。荒廃した農地の肥沃さを回復させる、殺虫剤を使わない、農薬を使わない、別の食物栽培方法を見つける、人々を支援して土地の使用を中止して、土に撒いた種が再生して木々が育ち、浸食を終わらせるようにする、また、地元のタンザニア当局と協働し、教育施設や医療施設を改善する、といったことを進めていきます。

徐々に人々は私達のことを信用し始めました。マイクロクレジットを提供し、女性達が少額ローンを借りて環境的に持続可能なプロジェクトを自分達で着手できるようにしました。思春期を過ぎた少女たちが通学できるよう、奨学金も提供しています。今では世界中で行われるようになり、女性の教育が向上し、女性達が力をつけてきたため、家族の人数は減少する傾向にあります。家族計画に関する情報も伝えています。ゴンベ近隣の12村落で開始したプロジェクトは成功し、今ではゴンベ周辺の52村落に、そしてさらに南部の、野生チンパンジーが最も多く生存している地域にまで広がっています。チンパンジー生息地周辺のアフリカのその他6ヶ国でも同様のプロジェクトを展開しています。

プロジェクトには多額の資金が必要です。大変な仕事です。そこで私は世界中を回って現状を訴え、注意を喚起し、資金の調達に努めるようになりました。世界中を回っている間に、未来に希望を持ってないという多くの若い人々に出会いました。無関心で自分には無関係だという人が大半ですが、悲観的な学生、ちょうど皆さんの年頃の悲観的な高校生にも日本で多く出会いました。怒りをぶつけてくる人もありました。話をしようとする、自分達の未来はあなた方にめっちゃめっちゃにされてしまった、もうどうすることもできないと口を揃えて言ってきました。こ

んな諺があります。「私達はこの地球を親から受け継ぐのではない。子供達から借りているのだ。」実際私達は皆さんの未来から借りているのではなく、掠め取ってきて、いまだに返そうとしていません。貪欲な物質主義的生活様式に憑りつかれており、金銭、あるいは権力をどれだけ持っているかで成功を測り、もっと、もっとと欲しがり、満足することはありません。際限は無いのです。そしてそういったことを当たり前だと思っており、この星の天然資源には限りがあるということを忘れてしまっています。永久に続くかのように思っていますが、そんなことはないのです。いずれ枯渇してしまいます。

世界中を回って若い人達に話をすればするほど、この地球に私達が課してしまった害のことを認識することになります。もう遅過ぎるのではないかと感じることもありました。高校生らが言うように、もうどうすることもできないのではないかと。しかしそんなことはありません。今こそ全てを改善していく時、方向転換すべき時、気候変動の速度を緩める対策を講じ始めるべき時なのです。こうして始まったのが「ルーツ&シューツ」というプロジェクトです。

最初のメンバーは、皆さんと同じタンザニアの12名の高校生で、9つの高等学校の生徒達でした。彼らは様々なことを不安に感じていました。国立公園での密猟のことを懸念している生徒もあれば、不法ダイナマイト漁、公害、野良犬、ストリートチルドレンのことを心配している生徒もいました。私は生徒達に同じような懸念を感じている仲間を見つけきなさいと言いました。そうして徐々に大きなグループへ発展していき「ルーツ&シューツ」が誕生しました。その主要メッセージは、私達一人ひとりに価値があり、自覚は無くても、一人ひとりがこの世界で何らかの役割を果たしているということです。そしてさらに重要なことは、そういった一人ひとりが集まれば、一日一日何か地球のために良いこ

とをすることができる、自分達で現状をどう変えていくかを選択することができるのだ、ということです。

さて、この地球上の全てのものは、熱帯雨林の中のように互いにつながり合っているのですから、「ルーツ&シューツ」のグループは、それぞれ3つのプロジェクトを設定するよう、当初から決めていました。すなわち、人々のためになること、動物のためになること、環境のためになることの3つです。12人の高校生達から始まったこの小さな運動は、今では100ヶ国に広がり、約10万のグループが活動しています。幼稚園にも大学にもグループがあり、高校にはたくさんの仲間がいます。皆さんの中にも刺激を受けて、仲間になってくれる人が現れることを願っています。「ルーツ&シューツ」の活動を通じて、その後の人生にも理念を持ち続けている人もいます。そういう人達は、全てを当たり前と思わず、必要以上のモノを欲しがらず、日々暮らしていく間にも地球のことを考え続けています。

8、9年程前、「ジェーンの旅」という映画がありました。その中で「ルーツ&シューツ」も取り上げられていますので、その部分をお見せしたいと思います。冒頭、地図が現れます。濃い緑色は「ルーツ&シューツ」のグループが多く活動している地域、白色はグループが存在していない地域です。



しかしこの白色の部分も今ではだいぶ塗りつぶされてきました。この小編をご覧くださいと「ルーツ&シューツ」とはどういうものかお分かりいただけるでしょう。皆さん自身も活動を始めることができ

るのだということを忘れないでください。活動はもちろん楽しいものです。楽しくなければ何事もうまくいきませんから。では、2本目のビデオをお願いします。

[ビデオ]



[音楽]

遠い国の話だと思う人もいるでしょう
身近なことだと分かっている人もいるでしょう
私達が自分達の向かうべき方向を見つけるきっかけとなる、それがあなたです
星たちよ、ありがとう
どんな風でも星を彼方まで吹き飛ばすことはできません
吹き飛ばそうとしても、依然そこにあるのです
ある人にとっては、それは離れていく強さです
またある人にとっては、それは心の中に眠る感情です
例え一人きりでも外に出てみれば、家に帰る道筋が分かるでしょう
星たちよ、ありがとう
ありがとう、ありがとう

世界中でどのような活動をしているか、お伝え出来たと思います。様々な活動があります。若い人達それぞれが持っている想像力の数だけ活動があるのです。私が希望を持っているということの最大の根拠はこういうことなのです。つまり、皆さん若い人達は、問題が何かと知りさえすれば、そして私達が

皆さんの思いを聞き、行動力をつけさせさえすれば、皆さんは世界を変えることができるということです。こうして私が講演している間にも、世界中の「ルーツ&シューツ」のグループが、世界をより良く変えようとするための行動を実践しています。そしてまた、今ではソーシャルメディアというものがあり、互いに連絡を取り合うことも可能です。野良犬の保護に熱心な人は、同じような気持ちを持っているグループと連絡を取り合うことができます。海洋のプラスチック廃棄の問題が心配なら、それについて活動しているグループ全てとつながることができるのです。あるいはストリートチルドレンに問題意識を持っている人は、同じように感じている人と会うこともできます。そうすることで大きな力へと育っていきます。こういった「ルーツ&シューツ」の活動こそ、私の希望の糧なのです。

さて「ルーツ&シューツ」という名称についてです。1本の大きな木を思い浮かべてください。ここには美しい木々がたくさんありますが、その中で最も大きな木でさえ、最初はちっぽけな種なのです。種が成長を始めると小さな根っこ (Roots) 、そして小さな新芽 (Shoots) が出てきます。手に取ってみても、まだまだちっぽけで、弱々しいものです。しかしその中には生命力、あるいは魔法とでも呼べるような力が潜んでいます。その力は非常に強力で、小さな根っこは水を吸うために煉瓦塀の裂け目の間から伸びていき、小さな新芽もまた、日光が届くように伸びていきます。岩が行く手を阻んでいても、根っこはそれを押しつけ、小さな新芽もまた、塀を突き抜けて伸びていく。その様子は、私達人間が地球、環境、社会に課してしまった全ての問題を打ち破ろうとするのと同じです。「ルーツ&シューツ」すなわち「根っこと新芽」は、希望のメッセージなのです。世界中の何百何千という若い人達が克服し、生きとし生ける物にとってより良い世界を創り上げていくという希望のメッセージなのです。

このプロジェクトでは、各国の若い人達が集う機会をできるだけ作り出そうとしています。実際に会うこともあります、多くは電子媒体でということですが、国が異なり、衣服や文化、食べ物や肌の色が異なると、それが人々の中の壁となってしまうことがあります。そうして互いを分断してしまうのですが、倒れて怪我をしたら、その痛みは同じです。怪我をした時に出る血の色も同じで、悲しい時に流す涙も同じです。おかしい時の笑いも、楽しいと感じる気持ちも同じです。そう、私達は人間という一つの家族であり、「ルーツ&シューツ」の活動は、皆さんのような若い人々の中にこの考えを育てる役割も果たしています。

さてもう少し、私が希望を持っている別の根拠についてお話しします。まず、人間には素晴らしい脳があるということです。人間は脳を働かせるようになってテクノロジーを発見し、それによって、より自然と調和のとれた生活が可能となり、また脳を使うことで、今のような生活を送れるようになったということです。そして自然には回復力があるということです。ゴンベはもうはげ山ではありません。木々が再び育ってきています。チャンスが与えられれば、破壊された場所も回復するのです。今日は持ってきていないのですが、いつも持ち歩いている1枚の葉があります。長崎の原爆投下後も生き残った1本の木の葉です。自然の持つ強靭さ、生命力というものは、チャンスさえ与えられれば驚異的なものなのです。絶滅危惧種の動物達にもさらなるチャンスを与えなければなりません。また、ソーシャルメディアは、気候変動等、ある一つの問題に関心を持つ世界中の人々をつなぐことができるものです。そうしてその声がどんどん大きくなれば、政治家や大企業でさえ耳を傾け、そうして世界を変革することだってできるのです。



最後に、人間には、不屈の精神、不可能に挑み、決して諦めない心があるということです。ネルソン・マンデラのように、ロベン島刑務所で17年間も厳しい強制労働に耐えた人もいます。私が南アフリカに到着した時、マンデラ氏はまだ刑務所に収容されていました。アパルトヘイト政権が崩壊したのは、一部にはネルソン・マンデラが刑務所から出所し、それでも驚くべき許しの気持ちを持っていたためでしょう。人というのは、非常に大きな身体的障害をも克服することができるものです。そして人々に大きな感銘を与えるような生き方をしている人もいます。私はいつも旅にミスターH（ぬいぐるみ）を連れてきます。映画の中にも登場しましたが、残念ながらこれは本物のミスターHではありません。本物のぬいぐるみは、私が英国を出る時、疲れているから国に残ると言っていたので連れて来ませんでした。私は明後日米国に入る予定なので、彼には可哀想ですが、今頃彼もフェデックスの小包で米国に向かっている途中でしょう。

さてミスターHというのは、28年前にゲイリー・ホーンという男性から贈られたぬいぐるみです。ゲイリーは21歳で失明しました。マジシャンになると決意しましたが、こう言われました。「ゲイリー、君は盲目だから良いマジシャンにはなれないよ。」それでも彼は言いました。「まあ、やってみます。」今では子供たちは彼が盲目だと気付かない程です。彼はこう言います。「人生で悪いことが起きても決して諦めてはいけません。前に進む道はきつとある」と。彼はスキューバダイビングもしますし、スカイダイビングもします。すごい人です。飛行機から漆

黒の世界に飛び降りるのですから、正気ではありません。ともあれ、彼がチンパンジーのぬいぐるみを贈ってくれました。その時私は言いました。「ゲイリー、あなたには見えないでしょうが、色が間違っているのよ。」そうして尻尾を彼に握らせました。チンパンジーには尻尾は無いのです。彼は言いました。「たいしたことないさ。君が行く所に連れて行ってやって、そうすれば僕はいつも君と一緒にいるから。」そうして彼は私と一緒に 63 ヶ国を巡り、「ルーツ&シューツ」の活動やその他色々なことを見て回りました。



ところでゲイリーの最新の業績といえば、自分で絵を描くことを覚えたことです。目が見えなくなる前に絵を描いたことはありませんでした。それでも小さな絵本「盲目の芸術家」を創り上げました。アマゾンでも購入できます。その中にミスターHの肖像画もあります。ゲイリーはミスターHの顔を見たことはありませんが、触ったことはあります。彼の妻が絵筆に正しい色を付けてやって描いたということです。本当にとっても素晴らしい人です。世界中を回っている間に会った多くの素晴らしい人の中の一人で、驚異的な不屈の精神を持った人です。しかし、後ほどお見せしますが、不屈の精神、そして生きる意志を持っているのは人間だけではないのです。しかしもう、質疑応答の時間となってしまいました。質疑応答終了後に、最後の4分ビデオをお見せしたいと思います。

